

春風秋霜

2月号

令和4年2月1日

島田市教育委員会だより
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一彦

1 成人式を終えて

1月9日（日）に行われた成人式は、コロナ禍ながら例年並みの72.4%という出席率の中、無事に終わることができました。式後に友達と笑顔で記念写真を撮る様子を見て、午前午後に分散したとはいえ、開催できてよかったですと思いました。

式の中で、市長は、男子体操で金メダルに輝いた二十歳の橋本大輝選手の、「チャンピオンは涙を流さずに常に前だけを見ているという強い気持ちを持ってこの試合に臨んだ。」という言葉と、過去3大会で7つのメダルを獲得し、キングと称された内村航平選手の、「思うような結果が出せず、報われない努力もあると思った。でも人生において、こういうことも大切なのだろうなと思った。」という言葉を紹介しています。

前だけを見て突き進むという強い気持ち、そして努力が報われなかった時も落胆せず、今までの自分の努力を評価し、無駄ではなかったと思える強さ、そのどちらの強さも新成人の皆さんに持ってほしいと激励しました。

機会があったら市長の言葉を子供たちに紹介し、今後の生き方に生かすよう指導をしてほしいと願っています。

2 飲酒について

成人式では今年もお酒を飲み過ぎて意識を失い、救急搬送されるという成人がいました。多くの皆さんの前で飲むことにより、自分の存在をアピールしたいとの思いから、飲み過ぎたのだと思います。一方、意識混濁を起こしている友達を介抱しない周りの成人にも違和感を持ちました。

私が静岡市立駒形小学校で勤務した時の教え子に、飲み過ぎで亡くなった子供がいます。二浪後やっと大学に進学し両親も大変喜んでいたのに、入学した年の5月の歓迎コンパで亡くなってしまいました。彼は、飲み過ぎ「気持ちが悪くなった」と言って、一人で会場を抜け出したため、仲間が気付いた時には遅かったということです。

葬儀には出席できなかったのが、自宅で行われた通夜に参列すると、母親は気丈にふるまっていましたが、小学生の時からサッカーの指導を熱く行い、当人に大きな期待をかけていた父親は放心状態でした。その姿を見て子供を亡くした親の深い悲しみに、心が痛くなりました。

過度の飲酒は脳機能の低下を引き起こし、最終的には呼吸する機能も麻痺し死亡すると言われています。死亡しなくても大きな事故につながる危険性は増加します。高橋法務官によると飲酒を強要した人だけでなく、その周辺の人も処罰されるそうです。教えていただいた主なものを紹介しますので、飲酒の危険性についての指導をお願いいたします。

① 本人が嫌がるのに強要して飲ませた場合

- ・飲ませた人は強要罪（3年以下の懲役刑。）
- ・周りから同調して飲むように強く働きかけて断りにくくする空気を作った人は 強要罪の共犯（1年6月以下の懲役刑）

② さらに急性アルコール中毒にさせた上で、死亡した場合

- ・飲ませた人は傷害致死罪（3年以上の有期懲役）※有期懲役刑の上限は20年
- ・同調して断りにくくする空気を作った人は、傷害致死罪の共犯（1年6月以上、10年以下の懲役刑）
- ・周りで盛り上げただけでも、傷害現場助成罪（1年以下の懲役または10万円以下の罰金も

しくは料料)

- ③ 誰も強要していないのに本人が自ら進んで飲んでるのははやし立ててあおった場合
・過失致死罪(50万円以下の罰金刑)
- ④ 酔いつぶれたところを介抱したり病院に連れて行かなかったりして放置した場合
・保護責任者遺棄罪(3月以上5年以下の懲役刑)
- ⑤ このほか、民事上の責任も負い、死亡慰謝料だけでも2000万円を超え、その他逸失利益などが積み重なり、1億円を超える重い責任を負うこともあります。

3 学校便りから

相賀小学校の学校便り12月号に、子供のほめ方についての記載がありました。それは、「You・メッセージ」より「I・メッセージ」というものです。良い結果を出した時に、「よくがんばった」と子供(You)をほめるだけでなく、「がんばってくれ、私(I)はうれしいよ」と伝えることが大切というものです。

子供によっては誉め言葉を素直に受け止めないこともあります。しかし、「I・メッセージ」はうれしいと思っている相手の感情まで否定することはできないので、誉め言葉として受け止めやすくなるそうです。

また、成果(結果)承認だけでなく、努力した過程をほめる成長承認を大切にしたいということも書かれていました。成長承認は、より難しい課題への挑戦意欲に結びつき、成果に結びつくという研究もあります。これらのことは、家庭への働きかけだけでなく、学校における子供たちへの関り方でも大切にしたいことだと思います。

肘かけ椅子

天野 裕継 スポーツ振興課長

「田舎も悪くない」

私は相賀という小さな田舎に生まれ育ちました。私が卒業した時の相賀小学校の全校児童は88名、同級生は14人と超小規模小でした。

大学を卒業し市役所に就職したころは、『できれば町内会とか隣組とかの近所付き合いなどはやりたくない。町内会費や組費は支払うのでそれで勘弁して欲しい。』などと考えていました。

そんな頃、私の息子が1才半とか2才頃だったでしょうか。息子も歩けるようになった頃のことです。ふと気づくと息子が家の中にも、敷地内や周辺にもいません。何処に行ったんだろう?念のため搜索範囲を広げ近所を探していたら、100メートルほど離れた近所の家の前で、その家のおばあさん「たっちゃん」が息子と遊んでくれていました。私が住む隣近所では、全ての家の家族構成や勤務先、病気の状態など、今で言う個人情報は当たり前のように共有されており、「たっちゃん」にしたら、脱走してきた子供が私の息子であることは容易に解ります。「たっちゃん」に遊んでもらっていた息子はとても安心して楽しそうでした。

田舎暮らし、隣近所の付き合いの大切さを痛感した瞬間でした。消防団、PTA、神社やお寺のことなど、地域で与えられたことやれることは、しっかりやっていくと決めた時でもあります。

今も、母のデイサービスの車が迎えに来る時、毎朝近所のおばあさん「はつみさん」が見送りに来てくれています。また、「はつみさん」は、自分の畑の往復の際にも顔を出して声掛けしてくれます。とても有難いことです。

少子高齢化が顕著な我が隣組では、今年還暦を迎える私でさえも、若手のエース(笑)。これから先は、近所のお年寄りを気にしつつ、週末に遊びに来る孫のお守と趣味のゴルフの両立を目指していきたいと思います。田舎も悪くない!